

ロシア革命に関する参考文献

池田嘉郎『ロシア革命—破局の 8 か月』(岩波新書 2017)

これまで革命の障害のように見なされてきた立憲主義者・自由主義者らの奮闘に光をあて、新たな社会を模索した人びとが当時に賭けていた思いや挫折を描き出す。あの時潰え、民衆の間に新たに生まれたものは何だったのか。歴史的意義を考える。

池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネーション』(山川出版社 2007)

帝政ロシアからソヴィエト共和国への転換の歴史的意義は、ソヴィエト共和国が帝政から引き継いだ課題「ネーションの創出」であったとし、集団労働の組織化による市民創出に着目し、その試みを首都モスクワを中心に分析する。

N. ヴェルト 遠藤ゆかり訳『ロシア革命』(創元社 2004)

ロシア革命は、そこに参加したさまざまな民族のエリートや、民衆ひとりひとりによる世界的問題解決のための試みの壮大なパノラマだったとする著者が、多彩な図版と資料を使い、20 世紀世界の動向を決定づけたロシア革命をわかりやすく紹介する。

D. ヴォルコゴーフ 白須英子訳『レーニンの秘密／上・下』(日本放送出版協会 1995 年)

レーニンの評伝。ペレストロイカ期以後のソ連史・共産党史に対する批判的・客観的視点から書かれている。

D. ヴォルコゴーフ 生田真司訳『トロツキー—その政治的肖像—／上・下』(朝日新聞社 1994 年)

トロツキーの評伝。ペレストロイカ期以後のソ連史・共産党史に対する批判的・客観的視点から書かれている。

奥田央編『20 世紀ロシア農民史』(社会評論社 2006)

「巨大な農民国」ロシアにおける革命は、農村における深刻な飢餓や抑圧をもたらし、工業化という「脱農民化」の動きはソ連という国家の基盤を掘り崩した。日本とロシアの専門家 18 人の共同研究。

E. H. カー 南塚信吾訳『ロシア革命の考察』(みすず書房 2013)

レーニン、ローザ、トロツキー、スターリン—政治的エリートによる革命を論じたソヴェト・ロシア史の基本書。

E. H. カー 塩川伸明訳『ロシア革命：レーニンからスターリンへ 1917～1929 年』(岩波書店 2000)

同じ著者の『ソヴェト・ロシア史』4 部作(その部分訳は、前掲『ボリシェヴィキ革命』と『一国社会主義』)の研究成果に基づき、一般読者のために書き下ろしたもので、1920 年代をレーニンのロシア革命からスターリンのロシア革命への転換ととらえ、革命の変貌する過程を解明する。

E. H. カー 原田三郎・田中菊次・服部文男・宇高基輔訳『ボリシェヴィキ革命 1917～1923 全 3 巻』・南塚信吾訳『一国社会主義：政治 1924～1926』・南塚信吾訳『一国社会主義：経済 1924～1926』(みすず書房 1967～1977)

20 世紀最大の歴史家 E. H. カーの金字塔『ロシア革命史』の最初の部分を翻訳したもの。いまなお、ロシア革命史研究の出発点と言える。

梶川伸一『幻想の革命：十月革命からネップへ』(京都大学学術出版会 2004)

共産主義の理想へ向かって着実に前進しているというボリシェヴィキ指導部の「幻想」が生んだ悲劇を、ロシア公文書館資料に基づき克明に描く。ネップが、戦時共産主義の延長上に構想されて市場経済が政策的に導入されたのではなく、飢餓民の自然発生的動向がそれを生み出したことを明らかにする。

S. F. コーエン 塩川伸明訳『ブハーリンとボリシェヴィキ革命 政治的伝記：1888～1938』（未来社 1979年）

米国のロシア政治史家の第一人者によるブハーリン評伝の決定版。

R. サーヴィス 三浦元博訳『情報戦のロシア革命』（白水社 2012）

「ロシア革命」を第一次世界大戦時の外交戦略に位置づけた国際関係論。

R. サーヴィス 中嶋毅訳『ロシア革命 1900-1927』（岩波書店 2005）

ソ連崩壊の20世紀末以降、ロシア革命は再び熱い論争の的となった。帝政末期からスターリンに及ぶ文脈の内に、都市と農村、上部と下部、後発国ロシア全土のあらゆる層に起こった「さまざまな革命」の起源と交錯をとらえ直す。政治史・社会史双方をふまえた統合的視点から革命の混沌と多面性を新たに描く、ロシア革命史の入門書。

溪内謙『上からの革命：スターリン主義の源流』（岩波書店 2004）

4部作『スターリン政治体制の成立』（岩波書店 1970～1986）の著者自身による概略。

R. V. ダニエルズ 国際社会主義運動研究会訳『ロシア共産党党内闘争史』（現代思潮新社 2008）

ロシア革命の主要な担い手であったロシア社会民主労働党ボリシェヴィキ派の党内における路線対立・政策論争を中心に、ロシア革命～内戦期のロシア・ソ連史を詳細に記述。

I. ドイツチャー 田中西二郎、橋本福夫、山西英一訳『トロツキー伝三部作』（新評論 1992）

トロツキーの伝記。トロツキーに好意的、スターリンに批判的。

トロツキー 藤井一行訳『ロシア革命史』（岩波書店 2000～2001）

ボリシェヴィキのリーダーの一人であった人物が、政権を奪取したボリシェヴィキの視点で描いた同時代史としてのロシア革命史。

西山克典『ロシア革命と東方辺境地域：「帝国」秩序からの自立を求めて』（北海道大学図書刊行会 2002）

従来の中央からの歴史像を再考し、ロシア全体との関連、中央と辺境の歴史構造、支配と統合、解放の論理を問いつつ、東方辺境地域の独自の社会構造と自立（律）性から、帝国の編成、革命、ソ連の形成過程をとらえ直す。「地域」（＝辺境植民地）の側から再構成した新たなロシア革命像。

R・パイプス 西山克典訳『ロシア革命史』（成文社 2000）

同じ筆者の『ロシア革命』と『ボルシェヴィキ治下のロシア』をもとに、著者自身が一般読者のために縮小編集したもの。

長谷川毅『ロシア革命下 ペトログラードの市民生活』（中公新書 1989）

1917年3月から18年5月に至るペトログラードの市民生活を、「低俗新聞」の社会面に載った記事によって再現する。政治によって社会が動かされ、社会が政治に影響していく歴史の全体像が活写される。

R. A. メドヴェージェフ 石井規衛、沼野充義監訳、北川和美、横山陽子訳『1917年のロシア革命』（現代思潮新社 1998）

ソ連の「反体制」思想家・歴史家によるロシア革命論。

山内昌之『スルタンガリエフの夢：イスラム世界とロシア革命』（岩波書店 2009）

イスラム世界の風土と歴史を背景にタタール人革命家スルタンガリエフの「ムスリム民族共産主義」を詳説し、激動の中央アジアを理解するための礎石を提示する。

『レーニン全集』全48巻（大月書店 1953～69）

日本語で読めるロシア革命の最重要資料集。